

後藤喜良一提出9月3日

私は、いわゆる「聖書信仰」に立ついわゆる「福音派」の教会の、しかも定年退職して、今はリサイクル牧師として無牧の教会で賞味期限付きの奉仕をしている一牧師の視点から発題させていただきます。元来私は、物事を逆から見る悪癖がありますので、関野師の講演のアウトラインを逆転させて、「争点」の発題とさせていただきます。私のことを良くご存じの先生はきっと苦笑いをしながらご容赦くださると思います。

私は、何よりもまず第一に、「聖書の福音の再確認」が必要であると考えています。

3.11を経験した福音主義教会にとって、「福音の再発見」が必要であると指摘される関野師は、「ルターの福音」に取って代わるような「21世紀の福音」を再発見して、「新しい宗教改革」を提唱しておられるようにさえ見えます。2000年の沖縄で開催された日本伝道会議のテーマであった「和解の福音」は、戦争の世紀、「20世紀を終える希望の福音」であったという正木師の指摘も、「それぞれの時代の福音」が必要であるという考え方のように私には見えるのですが、浅学非才の私の誤解でしょうか？

私は、聖書の神の福音は「どの時代にも福音である福音」であると考えています。それは、神の永遠のご計画で「私たちを御子と同じ姿に完成する福音」です。(ローマ8:28-30) 私は、「御子と同じ姿に変えられる」という完全な恵みの中に、「罪の赦し」、「義認」、「新生」、「和解」、「聖霊の内住」、「聖化」、「栄化」等の神の全ての恵みが含まれており、これらの福音の「救い」の目標は、「御子と同じ姿に完成される」ことであると理解しています。

「御子と同じ姿に完成される」という神の救いは、霊的＝人格的な救いで、神の完全な恵みです。私の理解不足かもしれませんが、私には、「全的福音」、「包括的福音」等が与える恵みは、「御子と同じ姿に完成してくださる」という驚くべき神の恵みに比べれば、外的で部分的で一時的な恵みに思え、歌い踊るほどの喜びを与える「福音」ではありません。

私は今、私たち福音派の教会で奉仕する者は、戦後70年、自分たちが伝えて来た福音が、聖書の正しい福音だったのか、自問自答する必要があるのではないかと考えています。

第二に「聖書信仰」の再確認は、私にとって「神の啓示の十全性と御子と同じ姿に変えてくださる聖霊によるみ言葉への信従」の再確認です。

聖書を教会に与えられた神は、私たち21世紀の教会に、聖書の追加や補足等として新しい啓示を与えてはられません。神は、1世紀にはなかった数え切れないほど多くの問題に取り囲まれている私たちに、「聖書だけがわたしのことばで、数多くの課題に直面しているあなたがたにとって十分で完全である」と語っておられると、私は確信しています。これが私にとって、實際上「聖書が、十全靈感を受けた神のみ言葉である」ということです。

私は、関野師が今校長をしておられる神学校で、40年以上前、「神の啓示は、旧新約聖書66巻において完結していて、聖書以外に神のみ言葉はない」と教えられ、何でもその事柄に対する神の御心が分からない時は、少なくとも新約聖書全体を読んで、その事柄に対する神からの指針を与えられ、その指針に自ら信従しつつ、教会で教えて来ました。「真理の柱また土台」である教会には、いつの時代にも、神のことばであり真理そのものである主イエスご自身と、主が御父のみ言葉として信従しておられた「聖書」の真理を学び直して、その時代への神のみ言葉を語っていく使命があります。

私たち福音派の教会は、今の時代に生きる人々と今の世界に、その一人ひとりと世界が持っているあらゆる教理的また倫理的な問題等に対する神からの指針を、聖書から与えられて、それを伝え、教える使命を果たしているか、自問自答すべきではないでしょうか。

しかし、聖書からの指針を与えられても、それを実行できなければ讚美と愛と義の実は結ばれません。「御子と同じ姿に変えられる」福音に生きる私たちは、「神のみ言葉」そのものであり、聖霊に満たされて、自ら全てのみ言葉を実行された、「御子、主イエスに見習う」歩みを、聖霊に満たされ続け、少しずつ「御子と同じ姿に」成長していくことができます。

最近、「聖書信仰」に立つ「福音派」の教会で、「わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい」という主のみ言葉を、自分自身は守ろうとせずに、律法学者のように教えるだけの「パリサイ派律法主義」の説教者が増えているように、私には見えます。聖書を書いた人々に靈感を与え、聖書に聴く人々に照明を与えられる聖霊は、私たちを、御子、主イエスと同じ姿に変えてくださいます。（Ⅱコリント3：18）

福音派のほとんどの教会が、「聖書は信仰と生活の唯一の基準である」という信仰告白をしていると思いますが、福音派の教会に集う人々の中で、主が「祈りなさい」と命じられた「主の祈り」を、毎日祈っている人は、決して多くないのでは？と、私は危惧しています。

聖書のみを神のみ言葉と信じ、聖書に立ち、聖書によって改革されていく福音主義教会で奉仕する者として、宗教改革 500周年が近づいている今、私たち一人ひとりが、「真の聖書信仰者」また「真の福音主義者」であるかどうか、自問自答すべきではないでしょうか。

第三に、「御子、主イエスと同じ姿に変えられる福音」は、「自然」や「災害」の理解と私たちの務め、「伝道と社会的責任」等の課題に真理の光を与えると、私は信じています。

「万物」は、ヨハネ1：1－2、コロサイ1：16—17等のみ言葉が明白に教えているように、神のことばである御子によって、御子のために造られ、御子にあって成り立っています。

天地創造の時、「仰せられた」のは御子であり、全ての被造物は、御子のみ言葉どおりに造られ、今も御子のみ言葉に従っているのです。天も地も海も、御子が命じられたところに留まっており、御子のみ言葉に従おうとして、植物は生じ続け、魚は海に、鳥は空に、獣は地に生まれ、増え、満ちようとし続けています。

神（御子？）は、人間に、「地を従えよ。全ての生き物を支配せよ」と命じられましたが、これは、愛の神が定められた厳格な（自然）法則に従って、緻密に統合された生態系の中にある生物を、愛を持って管理する使命が、私たちに与えられているということです。神（御子？）は、人間に対して、全ての生物に「緑の草を与える」と宣言されましたが、これは、全ての生物に神が与えられた食物を奪わずに守り与えよという、私たち人間への命令です。

うめき、産みの苦しみをしている被造物のように、御子に似た者へ成長するためにうめいている私たちは、万物を造り支えておられる御子に見習い、被造物を愛をもって支配される御子の知恵深いみ言葉に従って、地球環境を保全し、全ての生物を愛していかなければなりません。やがて御子と同じ姿に完成された私たちは、永遠の神の世界の共同相続人として、神の栄光を現わすために、万物を愛する知恵をもって、新しい天と地を管理するのです。

「伝道と社会的責任」も、「羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている人々をかわいそうに思って」、「御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやされた」（マタイ9：35－36）「主イエスを見習う」歩みでなければなりません。主は、生まれつきの盲人を見て、「わたしたち（主と弟子＝私たち）は、わたしを遣わしたかたのわざ（神のミッション）を、昼の間に行なわなければなりません」と語られ、全世界で伝道と社会的責任を果たす私たちとともにいて—「使徒の働き」やパウロの生涯で明らかのように—私たちが使命を果たすことができるように導き助け、神の栄光を現わしてください。

私たちは今、「わたしがTHE道、THE真理、THEいのちです」と言われる御子、主イエス・キリストを、あらゆることにおいて信頼し見習って、御子と同じ姿に変えられ成長しているか、自問自答する必要があるのではないのでしょうか？